

だんだんとわかってきたことがある。野田中学校に勤務していると、野田中学校区と吾妻地区という用語がよく出てくる。

野田中学校区にある校園は、野田小学校と福島わかば幼稚園、あづま保育園、さゆりこども園、そして野田中学校である。この5校園で野田地区幼・保・小・中連接推進事業という福島市の事業を進めている。これが、交通対策協議会や青少年健全育成推進会、まちづくり懇談会などになると、吾妻地区となる。吾妻学習センターと吾妻支所の管轄するエリアである。

私にとって、この「吾妻」という名称は特別な存在である。自分の生まれ育った地区となれば、当然のことなのかもしれない。私は、毎朝、校門の前に立っている。私が向いている方角は西である。私の視線の先、数キロメートルには、私の実家がある。私は、毎日、自分の実家の方を約40分間にわたって眺めていることになる。

視線を少し左にずらすと、安達太良連峰、その右には吾妻連峰、そしてまた右に目をやると、私のふるさとである町庭坂となる。小学生の頃に、午前中いっぱいをかけてスキーに行った広い空き地のような場所が肉眼でも確認できる。

昔の小学生は体力があった。重いスキーを担ぎ、スキーブーツを手に持って、空き地（牧草地）のある山めざして登って行ったのである。スキーの重さが肩にくい込む痛さや歩くことでの疲れなど気にならなかった。半日かけてのスキーが楽しくて仕方がなかったのである。

そのゲレンデにはもちろんリフトなどない。滑っては、えっちらおっちら上がり、また滑る。この繰り返しである。今はなくなってしまった吾妻（高湯）スキー場ではシングルリフトに乗った。栗子国際スキー場では友達とペアリフトに乗った。栗子に4人乗りクワッドリフトができたときには感動したものである。スピードが違った。そして、蔵王や安比ではゴンドラに乗った。それでも、みんなで先生に連れて行ってもらった町庭坂のゲレンデのことは忘れられない。いわば、下積み時代のようなものである。

我が家は吾妻中学校および庭坂小学校の学区の端っこだった。家の目の前には田んぼがあった。そこは野田中学校および野田小学校の学区だった。その田んぼでは、ゲリラカイトを飛ばして遊んだ。自然と野田小学校の子どもたちと遊ぶようになった。あの頃、他の小学校の学区に侵入するのは、なかなかのことである。それでもトラブルなどなく、仲良く遊んでいたものである。

冬になると、田んぼにスロープのような坂があり、そこがゲレンデとなった。スキーやミニスキーに没頭した。野田小学校の“連中”もやってきた。ときには、そり遊びに興じ、滑走距離を競ったものである。

中学生になり、部活動の練習試合や大会で野田中学校と対戦することがあった。相手選手の中には見覚えのある顔があった。ゲリラカイトやスキーの連中である。お互いに相手を認識しているにもかかわらず、声をかけ合うことはなかった。もはや、ただの対戦相手でしかなかった。なぜだか負けたくなくて、気合を入れて試合をしたことを覚えている。

あの頃の連中の中には、地元に残って活躍している者もいるかもしれない。お互いにずいぶんと歳をとってしまった。そのうち会えるかもしれない。楽しみである。